

## 佳作

### やさしい指

あがりはまとも

幼い頃、父が言った。人に優しくしてあげなさい。そうすれば、きっとお前を助けてくれるから、と。

それから少し大きくなった頃、今度は母が言った。人を信じてはいけない。人間は騙そうとするから。裏切るから。お前は何でも信じてしまうから、よく覚えておくんだよ、と。

何も分からない子どもの私は、答えを見つけられないまま、迷子のよう

に二つの言葉の間をさまよっていた。

そして、大人になった今でも、その出口は見えないままなのだ。

忙しなく鳴り響く無数のコール音。広いオフィスに均等に並んでいる、間仕切りされたデスク。緊張感が詰まったそのブースで、今日も大勢のスタッフが、電話の相手と格闘している。

「はい、畏まりました。この件につきましては後日、担当者から直接お客様にご連絡差し上げます。では失礼致します」

電話の対応を終え、終了のボタンを押す。と、同時に私は深いため息を吐いた。

「コイツ、アホか！ 説明書ちゃんと読まないで操作してんじゃないわよ！それで商品壊してクレーム電話なんか掛けてきて！」

私はパソコンのキーを、まるで機関銃でも撃ち放つような勢いで、荒々

しく叩きこんだ。

私たちのチームは、とある会社の通信サービスでお客様と直接電話でやり取りをし、サポートをするのが仕事だ。サポートと言っても、掛かってくる電話の内容はお怒りや苦情の内容が多いため、実際はクレーム対応係というわけだ。人は顔の見えない相手だと、何を言ってもいいと思うのだろうか。この間は、セクハラ紛いの電話も受けた。

「世の中、あんな人たちがいるのかと思うと、ゾツとする」  
イライラしながら一人、愚痴を呟いていると、隣の席のやり取りが聞こえてきた。

私は椅子を後ろに引いて、パーテーションの横からそつと隣を覗きこんだ。

「誠に申し訳ございませんでした。はい。いいえ！ 本当にご迷惑をお掛け致しました。はい。それでは失礼致します」

男は背を丸くしながら、電話越しの相手に謝るように何度もペコペコと頭を下げた。それから終了のボタンを押して、私と同じように深いため息を吐いた。

「ねえ薄井、大丈夫？ 随分長かったね。三十分くらいかかったんじゃない？」

「ん？ ああ、宮城か。平気、大丈夫。少し疲れただけ」

薄井は笑顔で答えた。こけた頬から漂う悲壮感と、満面の笑みが、実にミスマツチだった。

薄井は私のチーム仲間だ。年も同じ二十二歳。一緒に入社した他のスタッフは仕事の内容についていけず、ほとんど辞めてしまった。今、同期で残っているのは私と薄井だけだ。

「でも、あんまり一つの案件に時間かけ過ぎるとノルマがこなせなくなるから。前にも主任に注意されたから気をつけないと」

「気にしないでよ。『いざとなったら上が出るから』って、実際クレームがこじれて代わりに出たこと、ほとんどないじゃん。所詮対応させられるの、私たち窓口だしさ」

再び電話のコール音が鳴った。私の電話のランプが点いている。

「ハイハイ。次はどんなクレームかしらねえ」

私は急いでインカムをつける。

「お電話、有難うございます。お客様相談窓口、宮城でございます」  
私の中のスイッチも切り替わった。

業務終了のベルが鳴った。この音を聞くと、いつもほっとする。

「うあーっ、終わったあ。お腹すいた。ねえ薄井、バス停まで一緒でしょ？  
帰りにどこか寄って夕飯食べて行こうよ」

「うん、いいよ」

タイムカードを切って、私と薄井は会社を出た。

行きつけの居酒屋は、元気のいい店員達の掛け声が飛び交い、店内は大勢の客で賑わっていた。

「乾杯！」

グラスを軽く合わせて、私と薄井はビールで乾いた喉を潤した。

「はあ。しっかし今日もムカつく客が多かった！ 薄井も変な客に当たって大変だったね」

同情するように私は薄井の肩をポンポン、と叩いた。

「うん。でもお客さんに『アンタに話して少しだけ気が済んだ』って言うってもらえたから良かった」

意外な答えが返ってきた。てっきり落ち込んでいるのかと思っていたのに。それどころか、薄井の表情はどこか満足気に見えた。

「へえ。アンタって、そうやって考えられるタイプなんだ。私なんか、『犬が吠えてうるさいな』くらいにしかな思えない。つか、そう思わないとやってられないし。こんなストレスが溜まる仕事」

私は枝豆を口に入れながら、毒づいた。

「俺も全くストレスがないわけじゃないけど。でも少しでも誰かの役に立っているなら嬉しいよ」

そんな薄井を見て、私は皮肉交じりに呟いた。

「何だか『幸福の王子』って感じね」

「何？ それ」

「知らない？ 有名な童話なんだけど」

私はまるで読み聞かせでもするような口調で、その童話の内容を説明した。

「ある町に金の王子様の像がありました。そこに一匹のツバメがやってき

ました。ツバメは、王子に色々な苦労や悲しみをもった人々の話をしてあげます。すると王子は人々に同情してツバメを使って、自分の体を覆っている金箔や宝石をその人たちに与え、助けてあげたのでした。って、私が一番嫌いな童話よ」

「何で？ 良い話じゃん」

薄井は不思議そうな顔をして私を見た。

「だって最後に王子は金箔の剥がれたみすぼらしい姿になるし、ツバメは死んじゃって。可哀想に思った神様が王子とツバメを天国へ導いてくれるけど、何だか偽善的過ぎて気持ち悪い」

辛らつだな、と薄井は苦笑いした。

「でも他人のために自分を犠牲にできるのって、よっぽど強い意志がないと出来ないと思う。普通は途中で挫折しちゃうよね。ツバメも、王子のその強い心についていったんじゃないかな？」



こいつは、どこまでもポジティブな考え方をする奴だ。愚痴を言っているこっちが馬鹿らしく思えてくる。

「あー、やめた、やめた！ アンタと話が合わない。さあ、飲もう！」  
モヤモヤした気持ちを流し込むかのように、私は勢いよくビールを飲みほした。

「ふう、少しクラクラする」

「大丈夫？」

店を出て、私と薄井はバス停へ向かって歩いていった。明日が休みということもあり、いつもより飲みすぎてしまった。だが、ほろ酔い気分のフワフワとした感覚は悪くなかった。

「風が冷たくて、気持ちいいわね」

「うん。でもちよっと寒いかな」

季節は一月の半ば。南国とはいえ、沖縄の冬は結構寒い。きつと海風が強いからだろう。

外のヒンヤリとした空気が、ポカポカとした体の熱を、ほどよく冷ましてくれる。

もう少し、この時間を過ごしたくて、私は薄井を引きとめる理由を探した。

「そうだ。酔い覚ましに、もうちょっとだけ寄り道していかない？ 薄井に見せたいものがあるんだ」

「見せたいもの？」

「このすぐ近くなんだけど」

私は薄井を連れて、市内にある図書館へ向かった。その裏手には桜並木があつて、毎年この時期になると桜の花が咲いている。近道の公園を通り抜けて、私は薄井を案内した。

「ほら、ここだよ」

真っ直ぐ続く道沿いに、一列に並んで立っている桜並木。街灯に照らされた桜は、まだ蕾の木が多かった。でも所々、ポツポツと紅い花が開いているものもある。

「へえ、こんな場所があつたんだ？」

「ここ、小さい頃からよく桜を見に来てたんだ。結構穴場スポットだよ」  
そつと花に触れながら、薄井は呟いた。

「俺、最初に沖縄の桜を見た時、すごく鮮かで驚いた。何だか桃の花みたいで、向こうの桜とは全然違うって思った」

「向こう」とは、内地のことだ。薄井は沖縄県外の出身だ。

「そういえばアンタ、前はどこに住んでたんだっけ？」

「千葉。でも沖縄に親戚がいるから、最近ここに移って来たんだ」

「両親とか家族は、どうしてるの？」

その瞬間。冷たい風が吹いて、私はくしゃみをしてしまった。

「はあ。ちよつと冷えてきちゃった」

寒そうにしている私に、薄井は自分のジャケットを脱いで、さりげなく肩にかけてくれた。それからそつと私の髪に触れた。

ドキッ、と心臓が音をたてた。

「ほら、これ」

いつの間にかついていた花びらを、取ってくれたのだ。薄井の指は白く細い。女の私より綺麗な手をしている。

「や、やだ、何カッコつけてんのよ！ アンタ、私よりガリガリなのに。風邪引かれたら困るよ」

私は薄井の好意を素直に受け取れず、照れながらジャケットを返した。薄井は少し困ったような顔をして、笑いながら再びジャケットを着た。

「そうなんだよなあ。俺、剛って書いてゴウって名前なのに、全然強くな

「いんだよなあ」

「そうよ！ アンタ、これからも心身共にもう少し鍛えないとね。この間のプレゼント、ちゃんと飲んでる？」

「あのプロテイン？」

「そう、マツチヨな体になりますようにってチームの皆から貰ったでしょ？」

「無理。……あれ、結構マズいんだよ」

「もう挫折してんの？ 夏にはタンクトップが似合う男になるって皆に宣言したくせに！」

突然、薄井はボディビルダーのマネをした。

細い体に不似合なポーズで、私は思わず爆笑した。私達はふざけながら、並木道を歩いて帰った。

全国で一番早く桜の花が咲き始めた頃。高校時代の友人、ナナから私のところへ連絡があった。

「久しぶり。今度沖縄に帰るから会おうよ」

携帯のメールを見つめながら、急な出来事に私は驚いた。高校を卒業し、ナナは東京の大学に、私は地元の専門学校へそれぞれ進学することになった。それから約四年の間、一度も会ったことがなかったのだ。

だが、ナナと電話で話をしているうちに、学生時代の懐かしさが込み上げてきて、会う約束をした。

私たちは、とあるファーストフード店で待ち合わせをした。そこは学生の頃よく通った店だ。

お店に向かうまでの間、私は彼女との思い出を頭の中で巡らせていた。

ナナの家は父親が会社を経営していて、経済的に裕福な家庭だった。若

いうちは、後悔しないように好きなことを思いっきりやりなさい。そんな教育方針を持つ親の元で育った彼女は、人を引きつけるような話題をいくつも持っていた。私物はいつもお洒落だったし、趣味もたくさん持っていた。皆が知らないコアな映画や音楽、毎年夏に出かける外国旅行の話。気が付けば、いつも彼女の周りには人が集まっていた。

ある日、ナナは女子に人気があるブランド物のポーチを持っていた。

「それ可愛いね、いいなあ」

無意識にそんな言葉が私の口から出ていた。すると彼女は、

「それ、あげる。他にも持っているから」

と、私にポーチを手渡した。彼女にとっては、ただ友達として、善意のつもりだったのだろう。だが私は顔を赤くして、

「ううん。いらぬ。私には似合わないから」

と、それを断った。

ナナは私の態度が腑に落ちないという表情をしながらも、そっか、とだけ言った。

その後、私はトイレに駆け込んで、鏡に映る自分の顔をのぞきこんだ。

そんなに私は、物欲しそうな顔をしていたのだろうか？ 何だか自分が

嫌な人間に思えた。それを払拭するように、ゴシゴシと何度も顔を洗った。

ナナはすぐに人に物をあげる癖があった。皆とまでは言わないが、それを期待している取り巻きも少なくは無かった。

私はナナといると、まるで違う世界の人間といるような居心地の悪さを感じていた。それなのに再び会おうと思った本当の理由は、あの時の惨めな自分を否定したかったからなのかもしれない。

店に着いた私は、一度入口の前で深呼吸をして、思い切って扉を開けた。年季が入ったドアは、ギイと軋んだ音がして、私の手に重く感じた。



数年ぶりに会ったナナは、学生の頃より綺麗になっていた。まるで、ファッション雑誌に出てくるモデルのようにお洒落だった。

「どう？ 東京での生活は」

「うん、楽しいよ。遊ぶ所もいっぱいあるし、センスのある人もたくさんいて、毎日退屈しない」

「ふうん、そうなんだ。いいなあ、東京かあ」

「宮城は？ 今、何してるの？」

「私は、コールセンターで働いてるよ。もう、毎日クレームばかりで、うんざり」

「へえ、大変じゃん。でも頑張ってるんだ。昔から宮城って頑張り屋だったもんね」

何て中身のない会話だろう。上辺だけのやり取りが続く。無理に楽しく会話しようとすればするほど、息苦しくなっていく。なぜナナは、私に

連絡してきたのだろう。他にも親しい友人はいたはずなのに。

不意に携帯の音がした。ナナの鞆からだ。

「ごめんね」

と言って、ナナは携帯の相手と話しを始めた。聞きなれないイントネーション。東京でのナナは、こんな風に話をしているのだ。知らない彼女がそこにいた。私はナナに会って後悔していた。そして帰る理由を考え始めた。

「じゃあ私、そろそろ行くね。今日は会えて嬉しかったよ」

そう言いながら、おそろく二度と会うことはないだろうと思った。だが、ナナは名残惜しそうな表情で言った。

「私、今年の春から実家の会社で働くことになったんだ。今、荷造りで忙しいけれど、落ち着いたらまた会ってくれる?」

「え? そのまま東京で働くんじゃないの?」

「うん。たぶん、向こうには二度と戻らない」

妙にハッキリとした口調でナナはそう言った。

ナナとの再会からしばらくして、私は毎日、仕事に追われる日々が続いていた。急にチームの人数が減ったのだ。

数日前。上司である元木主任が、スタッフを集めて言った。

「来週、他部署に欠員が出たため、人事異動があります。今から呼ばれる方は新しいチームに配属になります」

「え？ また人が辞めたんですか？」

「ああ、いっぺんにな。新規事業の拡大で人手が全然足りないそうだ。だからこっちのチームから何人かヘルプで回すことになった」

「何ですか？ こっちだって結構、厳しい人数でやってるのに！」

「仕方ないだろ？ 向こうのプロジェクトを成功させないと、今期の売上

がかなり厳しくなる。社長からの通達だ。結局、誰かがやらなくちゃいけないんだよ。な、頼む。協力してくれ」

この通り、と主任は拝むように手を合わせた。こんな時だけ妙に腰が低くなる。本当に調子のいい人だとつくづく思った。

「それと薄井、異動になるスタッフの分、お前のシフト調整できないかな？」  
「大丈夫ですよ。俺、休みの日とか暇ですし」

「有難う、助かるよ。薄井はスタッフの鏡だな。皆も向上心を持って、成長してくれよ」

よく言うものだ。私たちの意見など聞かず、恐らく軽はずみに面倒なことを引き受けて、断れなくなっただろう。綺麗な言葉を並べて、ただ都合よく人を利用してはいるだけじゃないか。

私の中の聞き分けない性格が、毒づきはじめる。会社のため。皆のため。言葉はどんな姿にも変化する。要は人のとらえ方次第だ。

今日は、特に忙しい日だった。ひっきりなしに電話が掛かってきて、お蔭で休憩をとる時間もなかった。やっとの思いで帰れると、私は急いで帰り支度をした。すると隣でキーボードを弾く音が聞こえた。

薄井がパソコンに向かって何か作業をしている。

「薄井、まだ帰れないの？」

「うん。今日中に作成しないといけない書類があつて」

「何？ 書類って」

私は薄井のパソコンを覗きこんだ。それは私たちチームのオペレーターが、これまで対応した業務内容をまとめた資料だった。結構時間のかかる仕事だ。本来、これは私たちの上司である主任の業務だった。でも主任は面倒な事務仕事を、よく薄井に任せていた。

「また主任に無理矢理押し付けられたの？ いい加減、ハッキリ断った

ら?。」

「俺が自分から引き受けたんだ。主任、今日はお子さんの誕生日なんだって。だから早く帰って欲しかったんだ」

私は呆れてため息をついた。

「薄井。アンタさあ、自分がいいように利用されているって思わないの? もっとさ、要領よく自分のために働いたら?。」

「俺は大丈夫。平気だよ」

薄井は笑いながら答えた。

大丈夫。平気。こういうタイプの人間は、他人がどれだけ忠告しても、自分から苦勞を貰ってくるタイプだ。

「あつそ。じゃあ、私、先に帰るね」

「うん。お疲れさま」

私は挨拶をして、そのままオフィスを出ようとした。でもなぜか後ろ髪

を引かれるような気がして、振り返った。

暗い部屋で、薄井は一人で仕事をしている。そんな彼を私はじっと見つめた。

そして、もう一度自分のデスクに戻ってパソコンの電源を入れ直した。

「あとどれくらい？ 手伝うよ」

私は馬鹿だ。面倒だと思いつつ、結局、自分からそこに首を突っ込んでいた。

全ての作業が終わった時には、日付は次の日に変わっていた。

「有難う、宮城。本当に助かったよ」

「気にしないで。アンタだけだったら、朝までたっても終わらなかったわよ」

こんな時さえ、嫌味しか言えない自分の態度が恨めしかった。

「宮城は本当にすごいな。尊敬するよ」

「な、何よ、突然」

畏まった薄井の言葉に、私は動揺した。

「いつもさりげなくフォローできるじゃん。中々できないことだよ。俺も他の人のためにそんな風に出来たらしいなって思うんだ」

その言葉を聞いただけで。私は何だか胸が切なくなった。

「あ、有難う。誉めてくれて」

体は疲れていたが、心はとても温かい気持ちで満たされていた。

私は鼻歌を歌いながら家に帰った。

台所では、母がお茶をすすりながらテレビを観ていた。

「お帰り。遅かったわね？ 夕飯は？」

「ああ、食べてきちやった」

「やだ。もしかして彼氏とデート？ でもお父さんみたいな、頼りない男性に引っかけたら駄目よ」



母は仏間をチラリと見て呟いた。

それは母の口癖だった。父は私が幼い頃に他界した。長男だった父は、親戚によく頼みごとをされていた。家では偉そうにしていた父だったが、他人の前では、別人のように優しく、頼れる人間を演じていた。何度も保証人になりかけたり、叔父の会社が傾いて出来た借金のために、自らの退職金まで差し出したのだ。

それでも父は平気だ、年金と貯金で何とか暮らしていけるはずだから心配ないと強がっていた。でも結局心労がたたってしまったのだろう。倒れるまで、父は眠れない日が何日も続いていた。

「人間ってのは所詮、欲が絡めば血の繋がりなんて当てにならないわよ」  
散々苦勞を掛けられて、残ったのはあの仏壇だけだ、と母は今でも恨めしそうに語る。生前、よく家を訪れていた親戚たちは、今では全く寄り付かなくなっていた。

毎年旧盆の時期は、憂鬱でたまらない。余所の家は、親戚一同集まって仲良くご先祖様の供養をしているのだろう。だが、我が家では、母が今まで父に掛けられた迷惑の数々を、まるでお経でも唱えるかのように、私に聞かせるのだった。

「アンタには私みたいに苦勞して欲しくないわ。だから……」

「うん。分かってるよ。明日も早いから、もう寝るね」

母の小言が長くなる前に、私は自分の部屋へ逃げた。

この世の中に無償の愛なんて存在しない。人は見返りを求めるものだ。たとえ家族だったとしても。その見返りが得られなかった時、人は裏切られたと思うのだろう。

私は、自分がどれだけ利己的な人間なのか知っている。今日も薄井でなければきつと、知らない顔をして帰っていたに違いない。

部屋の灯りを点けずに、ボンヤリと天井を見つめていた。考えごとをす

るには、あまりにも疲れていた。私は着替えもせず、うずくまるようにして眠りに落ちていった。

今日は、月に一度のミーティングの日だった。私たちの会社は二十四時間体制で、早番と遅番でローテーションをしながら仕事をしている。そして月に一度、皆で集まって打合せをする日があるのだ。

私が集合場所の会議室へ入ろうとした時、中から笑い声が聞こえてきた。そつとドアを開けて中の様子をうかがうと、先に薄井とその隣に、女性がいた。遅番担当の田辺リョウコだった。二人で楽しそうに話をしている。私は胸の中に妙な騒めきを感じた。すぐにドアをノックして、少し大聲に挨拶をした。

「お疲れさまですー！」

お疲れさま、と二人は普段通り挨拶を返してくれた。気のせいだろうか。

リヨウコは少し、座る位置が薄井から離れた気がした。私は、わざとふたりの向かいに座った。それから薄井は私にも何気なく話しかけてくれたが、リヨウコと私は、会話をせずに皆が集まるのを待っていた。

薄井にとって、私はどんな存在なのだろう。その日以来、私は今までより強く薄井のことを意識するようになった。

ナナから二度目の連絡がきたのは、私が屍のように眠っていた休日の早朝だった。

鳴り続ける着信音に耐えきれず、私は寝ぼけながら電話に出た。ナナからだと分かった時、着信表示を確認しなかった自分に後悔した。急用なのかと尋ねると、特に大事な用事はないと言う。

毎日の残業で疲れていた私は、眠りを妨害された苛立ちもあり、無愛想に電話を切ろうとした。

「ごめん、でも何もしなくていいから、一緒にいてほしいの」

ナナの声は震えていた。ためらいつつも、私はナナに会うことにした。待ち合わせは、またあのファーストフードの店だった。

「ごめんね。でも今日は一人で家に居たくなかったんだ」

ナナは申し訳なさそうに私に謝った。何か辛いことがあるのは察したが、こちらから尋ねるようなことはしなかった。

特に話す話題もなく、沈黙が流れた。この息苦しさ先に耐えきれなくなったのは、私の方だった。

「あのさ、職場に変な奴がいてさ……」

気が付くと、私は薄井のことを口に出していた。そしていつの間にかナナに、恋愛の相談をしていた。色恋に疎い私の話なんて、幼稚できつと笑われるに違いないと思っていた。だが、意外にもナナは真剣に私の話を聞いてくれた。

「私の話も聞いてもらええる?」

自分の話が終わって気を楽にした私は、呑気にジュースを飲みながら彼女の話を聞いた。

「本当はね、私、不倫してたんだ」

「え? 不倫?」

思わず聞き返してしまった。ナナの口からそんな言葉が出てくるなんて予想をしていなかった。

相手は大学の先生だったそう。東京での生活が馴染めずにいたナナは、先生によく相談にのってもらっていたそう。そうしているうちに、お互い恋愛感情を持つようになったという。

「それが彼の奥さんにはれたの」

先生の奥さんは、ナナの実家を調べて親に連絡してきたそう。両親は会社の信用問題に関わるからと、ナナを沖縄に連れ戻したのだ。

「奥さん、私にも責任取れって会いに来た。だから私、かなりの慰謝料払ったの。お金で彼を私に譲ってもらおうとお願いしたの。それで彼が私のもになるならいいと思った。彼も奥さんと別れたいってずっと言ってたから」

でも先生は、奥さんの元へ戻ったのだった。

「私ね、人はお金とか物をあげればいいと今までずっと思ってた。だって皆、それで喜ぶんだもん。それで私のことを愛してくれるんだって勘違いしてた。でも、本当は誰も私のことなんか見てくれてなかった。結局、私は誰からも必要となんかされていなかったの」

窓の外を見つめるナナの顔は、まるで永遠に現れない誰かを待ち続けるような、ひどく寂しい顔をしていた。

「宮城、薄井、ちょっと来てくれ」

その日、私と薄井は、主任に呼び出された。

「お呼びでしょうか？」

「この案件を対応したのは、君たちか？」

主任は、数枚の書類を私たちに手渡しながら、厳しい口調で質問した。

その資料には、「重大案件」の印鑑が赤文字で大きく押されていた。

「お客様から『いつまで経っても連絡が来ない』とクレームが入った。それで調べたら、別のクライアントの所に連絡が入っていたらしい」

事故だ。個人情報漏えいした。深刻なミスが起こったのだ。確かこの案件を担当したのは田辺さんだった。

「この件は遅番の田辺さんに……」

私が説明しようとする言葉を、薄井はさえぎった。

「すみません、僕の連絡ミスです」

主任の口からチツ、と舌うちする音が漏れた。



「何やってんだ！　ただでさえ重クレームの顧客なのに！　コール履歴見て分かるだろ！」

主任の怒鳴り声が、オフィス内に響きわたり、周りが静まり返った。

私と薄井はずっと下をうつむいたままだった。蚊の鳴くような細い声で薄井は、

「申し訳ございませんでした」

と、深く頭を下げた。

私はずっと黙っていた。噛みしめた唇が震えていた。

「始末書。すぐに書いて提出しておくように」

重苦しい空気の中、怒りを鎮めるように、主任は足早にオフィスを立ち去った。

「薄井、ちょっと談話室に来て」

苛立ちを隠しきれずに、強い口調で私は彼を連れ出した。

「何でさつき嘘ついたの?」

談話室に入って、私は薄井を睨みながら、質問した。

「あの件は田辺さんに引き継いだ件でしょ? 何でアンタが勝手に謝ってるのよ?」

「俺も後追いしなかったから、俺の責任だよ」

「違う! 田辺さんからの引き継ぎ書には、あの件は完了したことになるでしょ。田辺さんの責任でしょ? まさか最近の田辺さんのミス、アンタが代わりに謝ってるの?」

「田辺さんは、大学の奨学金返すためにダブルワークしてるんだ。だから疲れてるんだよ」

私は思い切り机を叩いた。

「ふざけないで! 仕事なのよ! そんな個人的な話、言い訳にならない

でしょ？ ミスして一番迷惑するのはお客様なんだよ！ 田辺さんを庇うのは田辺さんのためじゃない。薄井、アンタのやったことって、自分が必要とされてるって思いたいだけの自己満足じゃない！ ただ他人に媚びているだけでしょ」

一瞬。薄井は辛そうな表情をした。そして迷惑かけてゴメン、と私から目を反らした。

「もう一度と、こんなことしないで」

私は乱暴に扉を閉めて部屋を出ていった。

その夜。私はボンヤリとテレビを観ながら、昼間のことを考えていた。大好きなドラマの内容はほとんど頭に入ってこなかった。

最低だ。今日は薄井に言い過ぎた。あの言葉を薄井にぶつけた時の、彼の表情。今まで見たことのないものだった。おそらく薄井の一番触れてはいけないところに、私は触れてしまったのだろう。謝らなければ。私は携

帯を手にした。画面には着信履歴が表示されていた。マナーモードを解除し忘れていて、気が付かなかった。薄井からだ。何かメッセージが残っている。私は急いで留守電を再生した。

「薄井です。えっと、あの、今日はゴメン」

それからしばらくの間があった。

「正直、シヨックだったけど、でも嬉しかった。宮城は、いつも俺のこと心配してくれるんだよね？俺は相手に優しくしているつもりで、本当は相手のためにならないことをしていたのかもしれない。今日、宮城に言われて分かった気がしたんだ。もし許してくれるなら、これからも、ずっと……」

そこでメッセージは切れた。私は急いで電話を掛け直そうとした。が、止めた。

「……やっぱ、来週直接会って謝ろう」

少し間をあけた方がいいと思った。来週の月曜に薄井の顔を見て謝りたい。

ごめんね、薄井。そう言えば、彼はまた許してくれるのだろうかと思った。いつものように平気、大丈夫と言いながら。私は薄井の笑顔を思い浮かべながら眠った。

月曜日の朝。業務開始のベルの音が鳴った。大勢のスタッフが整列している前で、主任が挨拶をした。

「おはようございます。では本日の朝礼を始めます」

そこに薄井の姿はなかった。もしかして遅刻したのだろうか？ でも連絡も無いなんて。

どこか具合でも悪くしたのでは、と私は不安になった。

挨拶の後、主任は少し黙っていた。それからためらいがちに、重い口を

開いた。

「ええ……、皆さんに重大なお話があります。先週、スタッフの薄井君がお亡くなりになりました」

室内がざわめいた。今、何と言った？ 主任の言葉と現実が結びつかない。

「事故に遭われたそうですが、詳細についてはまだ確認中です。なお業務の引き継ぎなどに関しても、また詳細が確認出来てからお話します」  
突然知らされた薄井の死に、私は言葉を失い、ただ呆然とするしかなかった。

どんよりとした曇りが続いていたのに、その日は嘘のように晴れていた。昨日までコートを着ていた人がいたのだが、今日は長袖のシャツだけで十分暖かい。沖縄の天気は気まぐれだ。

私は薄井の住んでいたアパートの前を訪れた。薄井の葬儀は身内だけで済ませたらしく、職場の人たちも皆、葬儀に参列することが出来なかつた。私は薄井の死を受け入れられずにいた。彼の死体を見たわけでもないのに、ただ目の前から消えたような感覚があつた。本当はこの世界のどこかで薄井はまだ生きているのではないだろうか。そんな気持ちを抱いたまま、彼の家族に会いに行こうと思つた。

しかし何も出来ず、ただじつと下から二階の薄井の部屋を見ていた。すると部屋の玄関から初老の男性が何か荷物を抱えて出てきた。

私はその男性に駆け寄って声を掛けた。

「あの、薄井君のご家族ですか？」

男性は私を見て、少し眉に皺を寄せた。

「親戚ですが、貴方は？ 剛の彼女？」

「いえ……あの、職場の同僚です」

職場の同僚。私と薄井はそういう関係だったのだと、あらためて自覚した気がした。

「ああ、それは。剛がお世話になりました」

男性は深々と頭を下げた。

「いえ、こちらこそいつも薄井君に助けてもらって。薄井君はいつも仲間思いの人だったので」

「そうですか。あの子らしい生き方をしていたんですねえ」

男性は、抱えていた荷物に視線を落として優しく微笑んだ。

「剛は小さい頃に親を亡くして。両親とも自殺だったんです」

「そんな……」

「あの子はいつも、『自分が必要じゃない人間だったのか?』ってずっと悩んでいたから」

誰かの役に立てているなら嬉しいよ。私はその時、初めて薄井の言葉の



理由が分かった。

「誰かに必要とされたいって、それがあの子の願いでした。今回の事故も、道で倒れたお婆さん助けてたって。剛は本当に良い子だった。でも、残された人の気持ちも考えて欲しかった」

そう言つて、男性はすすり泣いた。

こんなに穏やかな日なのに。日向はとても暖かいのに。日蔭は寒くてまだ、冬の気配のままだった。

アパートへ寄つた帰り、私は薄井が事故に遭つた場所へ向かつた。バスの中で、誰かの話声が聞こえた。

「最近、この辺りで事故あつたらしいぜ」

「ああ。確か人助けして代わりに、つてやつたる?」

チラリと見ると、リクルートスーツ姿の若い男性二人だった。就職活動

の帰りだろうか。

「何かさあ、人助けって響きはいいけど、そんな風に助けられても引くつて言うか。カッコつけて生きてるなって感じするよな」

会話を聞きながら、私の体はずっと震えていた。お前たちに薄井の何が分かる？ 何も知らないくせに！

許せなくて、私は思わず立ち上がった。だが、彼らの姿はもうなかった。いつの間にかバスを降りてしまっていたらしい。私のちっぽけな正義感は、行き場を見失ってしまった。

事故の現場に着いて、私は花を供えて手を合わせた。気が付くと、涙がとめどなく流れていた。

薄井の隣にしていると、あの優しさがとても心地よかった。けれど、同時に不安でもあった。それは何か予感みたいなものだ。彼の優しさは、いずれ彼自身を壊してしまうだろう。まるであの童話の王子のように。どれだけ

他人に尽くしても、やがて身も心もボロボロになって世間から捨てられてしまう。そんな惨めな彼を見たくはなかった。

そして許せなかった。薄井の眼差しが他の人に向いてしまうことが。田辺さんを庇ったあの日。もし彼の優しさが私だけに向けられていたならば、あんなに怒っただろうか。彼の行いは純粹な善意だと言い聞かせながら、心はいつも独占欲で潰されそうになった。もし、彼に特別な人ができて、特別な感情を持ってしまったら？ それが私でない他の誰かだったら？ それくらいなら。他の人のものになるくらいなら、彼を壊してしまおう。自分の心の中で、欲望を囁く不気味な声が聞こえた気がした。

私は怖かった。薄井の幸せよりも、不幸を願う自分の心が一番恐ろしかった。

家に戻った私を待っていたのは、不満を募らせた母だった。

「ねえ聞いてよ。今日お父さんの親戚が、お墓のことで文句を言いに来たのよ！」

母の愚痴を要約すると、面倒なことはこっちでやれ、と一方的に言われたそうだ。

世界中の不幸を背負ったような母の嘆きをボンヤリ聞きながら、私は父のことを想った。

人に優しくすることを私に教えようとした父。親戚に尽くして裏切られた父。私たち家族まで見捨てたのでは、本当に報われない。

「お母さん、今でもお父さんのこと、憎い？」

私の問いかけに、母は言葉を詰まらせた。

「お父さんは本当に馬鹿正直の、単純な、お人よしだったと思う。でも私には立派なお父さんだった。だから私は憎むことなんか出来ないよ」  
母は少し不機嫌な顔をして言った。

「馬鹿ね、憎かったら毎年お盆なんかやらないわよ」

そして仏壇を正面から見据えるように座り直した。私に背を向けて父の遺影を見つめている母は、どんな表情をしているのだろう。

友人でも、恋人でも、家族でも。別れ方はどうであれ、一度心を通わして受け入れた人と離れるのは、やりきれない。父も、ナナも、薄井も。きつと何度も人に裏切られたのだろう。それでも彼らは、探し続けていたのかもしれない。そして一番、人を信じたいのは誰でもない、私自身なのだ。

薄井の死から数日が経った。私は淡々と業務をこなしていた。あれだけイライラしていたクレームも、今では何も感じなくなってしまった。理不尽な理由で相手に怒鳴られても、はい、はい、と機械のように無機質に流すだけだった。これなら時報案内の方が、まだ愛想があるかもしれない。

もう辞めようか、この仕事。漠然とそんなことを考えた時、電話のコール音が鳴った。

「お電話有難うございます。お客様相談窓口、宮城でございます」

私は感情の籠らない声で電話に出た。

「あのお、ウスイさんっていらっしやいますか？」

不意に薄井の名前を聞いて、私はハツとした。相手はボソボソと喋っていて聞き取りづらかったが、若い男性の声だった。薄井について本当のことを告げることは出来ないのです、私は他の言い訳を考えた。

「申し訳ございません。薄井は他の部署へ異動になりました。ご用件は私が承りますが」

「そうなんですか。ウスイさんに直接お礼が言いたかったんですけど」

「お礼？」

その男性は薄井が以前、電話を受けた顧客だった。

「僕は学生時代からずっと引きこもりで。今年、二十歳になるんですけど、部屋からずっと出れなかったんです」

男性は、ネットばかりやってる毎日だったらしい。しかし、ネットの世界でも人間関係が上手いかず、むしろしゃして、こちらにクレームの電話を掛けたそうだ。

「半分冷やかしのつもりだったんですけど。でも、ウスイさんはずっと僕の話聞いてくれて。世の中、嫌な人ばかりじゃないかもしれないって思うようになったんです」

そしてつい先日、ようやく部屋から出ることが出来たらしい。

「僕、ずっと自分のことを世の中でいらない人間だっと思ってたから。ウスイさんのお蔭でちよつとだけ。前向きに考えることができました」  
「有難うございます。本人も喜ぶと思います」

電話を切った後、私は今のやり取りをメモに書いた。そして、誰もいない隣の席に貼った。この伝言が薄井に届くように、と願いを込めて。

初めて心の底から、この仕事をやって良かったと思った。

仕事帰りに、私は薄井と来た、あの桜並木を一人歩いていた。満開の時期は少し過ぎていた。青々とした葉がついた木もある。

私は独りを呟くように、薄井に語りかけた。

「『ウスイ』の癖に全然薄くないじゃん。全然弱くないじゃん。強いじゃん」  
ハラリと落ちてきた花びらに手を伸ばした。そしてそつと唇に当てた。

「ねえ薄井。アンタにずっと言えなかつたけど、私はアンタといる時間が幸せだったんだよ」

また桜の花びらが私の髪に落ちてきた。花びらを取ってくれた優しい指を思い出した。私はその場にうずくまって独り泣いた。

(了)